

〈 礼拝説教 〉 2011年 2月 6日

## 剣を取る者は剣で滅びる

詩編 37編 14～19節

マタイによる福音書 26章 51～56節

武田真治

### 一、ユダがイエス様を裏切った理由

十二弟子の一人であったイスカリオテのユダが、なぜイエス様を裏切ったのかという理由については、昔から様々なことが言われています。

例えば、イエス様を裏切ることで銀貨 30 枚を得ているところから、ユダは単にお金が欲しかっただけだとか、自分の期待していた救い主とイエス様があまりにもかけ離れていたのが失望して裏切ったなど、しかし最もよく言われている説は、ユダが熱心党という政治結社にも属しており、その熱心党のスローガンであるローマ帝国の支配からの独立を成し遂げる為に、イエス様の逮捕を利用したのだという説です。

即ち、イエス様が無理やり逮捕されそうになったならば、弟子たちやイエス様に従っている人々がイエス様を守ろうと抵抗するだろうと、それに対して捕まえようとする側はそうはさせないと弟子たちをも逮捕し始めるにちがいない、そうなれば、大きな騒ぎになり、周りの群衆も巻き込んで暴動が起こるだろうと、そしてこれを機に、その暴動をローマ帝国への反乱へと拡げて行こうと考えていたのだと。

時はまさに「過ぎ越しの祭」でした。エルサレム神殿に巡礼に来ていた多くの群衆で街は膨れ上がっていました。この時、イエス様と弟子たちが居たゲッセマネの園の周りにも多くの巡礼者が野宿をしていたと考えられます。その中で騒ぎが起きれば、ユダの考えた筋書き通りに事が運ぶということも全くあり得ない事ではなかったのです。実際、イエス様を捕まえてローマに引き渡そうとしている『祭司長たちや民の長老たちの遣わした大勢の群衆も、剣や棒を持って一緒に来た』(47 節) とあります。わざわざ剣や棒を持参していたということは、彼らも弟子たちの反撃や暴動をある程度、想定していたということでしょう。

そしてまさにユダの期待通りのことが起こるのです。それが今日の箇所です。

即ち『そのとき、イエスと一緒にいた者の一人が、手を伸ばして剣を抜き、大祭司の手下に打ちかかって、片方の耳を切り落とした』です。

イエス様が捕まりそうになって、そうはさせるかと弟子の一人が思わず持っていた剣を抜いて切りかかってしまったのです。そして手下に損傷を与えてしまいました。それに対しては、その手下の仲間たちが黙っていません。彼らも剣を抜くでしょう。そうなれば弟子たちの側も我も我もと加わることとなります。大騒ぎとなり、もはや誰にも止めることは出来なくなります。一触即発の事態に立ち至ったのでした。

この時、ユダは心の中で「しめしめ、思った通りになってきたぞ」とほくそ笑んでいたのではないのでしょうか？

## 二、『剣をさやに納めなさい』

しかしまさにその瞬間、イエス様が剣を抜いてしまった弟子に対して『剣をさやに納めなさい。剣を取る者は皆、剣で滅びる』と言葉を掛けられたのでした。それ以上の弟子たちの反抗を赦されなかったのです。

更に『ルカによる福音書』では、この同じ場面でイエス様が『その耳に触れていやされた』と記されています。手下たちの反撃も防がれたということでしょう。一触即発の場面がこのイエス様の言葉と行動で一気に静められてしまいました。そして、自ら反抗することなく、捕まえようとして来ていた者たちの手に身を任されたのでした。

このイエス様の行動の意味は、一つにはこのことから発する反乱や暴動を避けるためでした。このまま突き進めば剣が剣を呼ぶような反撃の連鎖が始まることをよく知っておられた上で、そのような怒りと復讐の連鎖を断ち切られたのです。それは逆に言えば、イエス様は、ユダが目論んでいたような暴動や社会変革を目指しておられたのではなかったということであり、ましてや武力によるローマ帝国からの独立運動などは赦されなかったのです。この時点で、ユダの計画は見事に挫折したのでした。

また、このイエス様の行動は、弟子たちの為を考えての行動でした。それは、一つには弟子を守るための行為でした。あたかも自首するかのように捕まってしまわれたことで、それ以上の逮捕者を出さないで、弟子たちに危害が及ばないようになさったのでした。そしてもう一つは、この出来事を通して弟子たちに「教え」を授けられるためでもあったのです。それが『剣

を取る者は皆、剣で滅びる』という言葉です。

### 三、『剣を取る者は皆、剣で滅びる』

この有名なイエス様の言葉は、その後の教会の歴史で色々な場面で使われて来ました。ある時は、戦争を拒否するスローガンとして、またある時は無抵抗主義を標榜する言葉として。おもしろい所では、剣（けん）ではなくペン（＝新聞や議論）で戦えという意味にも採られたりしました。

ただ間違っただけとはいけないことは、このイエス様の言葉は、相手から暴力や差別を受けた時に武力闘争をしないことで、人々の理解や支援を得る事が出来るからとか、その方がマスコミの注目を得られるとかの理由で抵抗しないことを選ぶということではないということです。ここでイエス様は、そもそも「剣」を手にする者自身が「剣で滅びる」から剣を取るなど、自らに滅びを招かないために剣を手にするなど言われているのです。

この場合、「剣」という言葉が表している意味をもっと広く受け取ることが出来るようにも私は思います。それは「おのれの武器・自分の強さ」とも考えられるのではないかと思うのです。自分の力に拠り頼み他者を攻撃し、傷つけて生きて行くような生き方は結局、自らに滅びを招くと。

あるいは、「言葉の剣」ということにも受け止められます。きつい言葉や裁きの言葉を用いて相手に切りつけ相手を刺し、それでその人に勝ったと思っているような生き方は結局、その人自身が滅びるのだと。

その点でイエス様も「ご自分の力」を用いようとされれば、簡単に敵を蹴散らすことがお出来になりました。それがこの後の 53 節以下の言葉です。

即ち『わたしが父にお願いできないとでも思うのか。お願いすれば、父は十二軍団以上の天使を今すぐ送ってくださるであろう。しかしそれでは、必ずこうなると書かれている聖書の言葉がどうして実現されよう。』です。この言葉は、イエス様が自らの力に頼られることなしに、神様のご計画とその導きに自らを委ねられたということではないでしょうか？

このイエス様の「教え」は、十字架を前にして弟子たちへの最後の教えでもあります。イエス様はご自身の身をもって、自らの力にのみ拠り頼んで生きるのではなく、神様のご計画と導きに委ねて生きて行くことを弟子たちに、最後に教えられたのではないかと思うのです。

#### 四、イスカリオテのユダに対しても

『剣を取る者は皆、剣で滅びる』という言葉はここではイエス様の側にいた弟子たちへの言葉となっていますが、そこにはイエス様を裏切ったユダもいました。「接吻（キス）」を逮捕の合図にしたのですから、イエス様の最も近くにいたはずです。

ユダという名前は当時よくある名前でした。区別をする為に「イスカリオテの」と呼ばれていたのですが、この「イスカリオテ」という言葉の意味については、大きく分けて二つの理解があります。一つは、「イッス（～の人）+カリオテ（地名）」と読む解釈で、「カリオテ人の」というユダの出身地を表すという理解でした。もう一つがあだ名であるという理解で「イッス（～の人）+シカリオス（剣）」と読むのです。この理解に立てばまさにユダは「剣の人」というあだ名で呼ばれていたこととなります。ここから彼が熱心党（ローマ兵や暗殺を恐れていつも剣を携帯していた）の一員であったとも言われているのです。

そうすると今日の『剣を取る者は皆、剣で滅びる』という言葉は、まさにご自身のすぐそばにいるそのユダに対して語られた言葉でもあったと考えられるのです。「剣の人」と呼ばれる彼に『剣を取るな。滅びてしまふな』という「招きの言葉」ではなかったのではないのでしょうか？

ここに至ってもイエス様がユダを悔い改めへと招いておられたという事実は本当に感動を覚えます。ご自分を裏切ったユダです。しかもユダはイエス様の逮捕を自分の思想を実現するために利用しようとしているような男です。そのユダの為に『滅びるな。戻ってこい。まだ遅くない』と尚も招かれておられるお姿に、本当に深い「主の愛」を思わざるを得ません。

その「主の愛」は、今の私たち一人一人にも注がれています。『滅びに向かうような生き方をするな。自分の力や考えだけで生きるな。悔い改めて私のもとに戻っておいで』と、イエス様は私たちがどのような状態に立ち至っても尚も見捨てず「招きの言葉」を掛けて下さっていることを忘れないようにしましょう。『剣を取る者は皆、剣で滅びる。』のです。

（説教より抜粋）